

発掘速報展（平城宮跡資料館）

「奈良の都を掘る－発掘速報展 平城 2002－」

2002年11月1日から21日まで、平城宮跡資料館で、上記の速報展を開催しました。2001年度に平城宮跡発掘調査部が実施した発掘調査の成果をまとめて紹介したものです。現地説明会の機会のなかった現場も多く、今回も好評のうちに終えることができました。展示からいくつか紹介します。

平城宮では、まず第一次大極殿院西楼（第337次）の調査では、赤色の彩色（ベンガラ）を残す「埋め木」が目をはきしました。赤い柱は奈良の都を象徴するものともなっていますが、平城宮跡内で実際に赤塗りの柱材の実物が出土したのは意外にも今回が最初です。「小便禁止」看板などの木簡にも熱い目がそそがれました。木簡の現物展示は保存上、多くの困難をとまいます。今回も照度計を設置するなど、展示環境のデータの蓄積につとめました。平城宮では、ほかに、第二次朝集殿院南門（第326次）の位置を確認し、規模、造営工事の過程が判明したことを紹介しています。

平城京内では、宅地と寺院の調査が主になりました。長屋王邸の中枢部の調査（第329次）では、懸案であった建物規模を確定しました。寺院では、興

福寺関係の調査が主で興福寺中金堂では、創建時以来の度重なる火災と復興の様子を展示しました。一乗院（第330次）と大乘院（第336次）ではともに、園池の変遷をたどりました。明治以降、一乗院は裁判所に、大乘院は一時小学校の敷地になっています。今回は、こうした近代史に関わる出土遺物も展示しました。ノート代わりに使われた石盤^{せきばん}の前では、昔話に花を咲かせる姿がみられました。

（文化財情報発信専門官 千田剛道）

公開講演会

奈良文化財研究所 第91回公開講演会

毎年、春と秋の2回にわけておこなわれる恒例の公開講演会が、2002年11月16日、平城宮跡資料館講堂にて開催されました。通例、奈良文研に所属する研究員が交代で2名ずつ講演するのですが、今回は初めての試みとして、2名の研究員のほか、町田章所長が講演をおこないました。

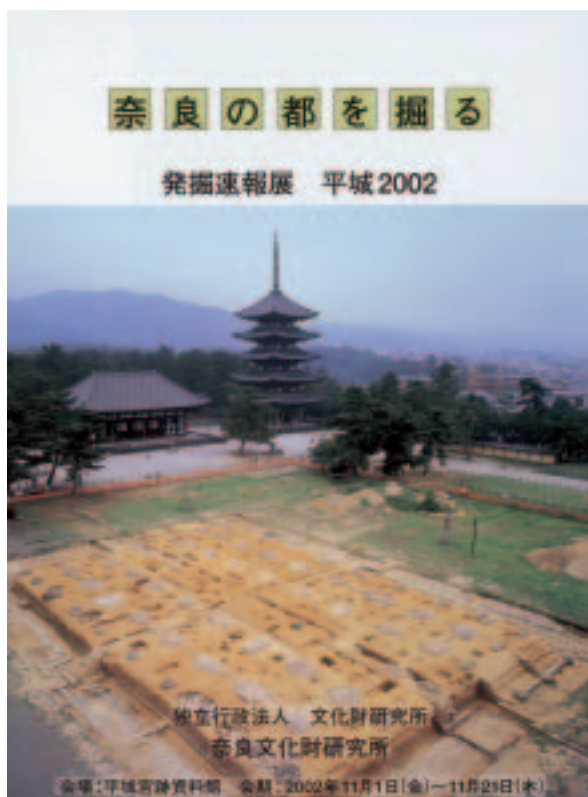
講演はまず、町田所長が「考古学用語のあれこれ」と題して、考古学で通常もちいられる各用語の実態について講演しました。「音読みと訓読み」「古い言葉」「言葉の意味と異なる用例」という設問について、用語のいわれや伝承の仕方、ニュアンスの違いなどを経験談や事例を交えてわかりやすく説明され、好評を博しました。

つづいて、平城宮跡発掘調査部の金田明大が「歴史空間を地理情報で視く」と題して、GIS（地理情報システム）と考古学分野での利用について講演しました。最近、脚光を浴びつつあるGISの原理を紹介するとともに、考古学への様々な利用について、実際に試みた成果を画面で表示しつつ、考え方や方法などを解説しました。

最後に、平城宮跡発掘調査部の平澤麻衣子が「巨大建造物は足元が肝心－平城宮第一次大極殿の基壇－」と題して、巨大建造物を下から支える基壇について、現在復原工事が進行中の第一次大極殿を題材に講演しました。基壇の外装や作り方について簡単にふれた後、第一次大極殿の基壇形態について、模型や実際の工事写真などを交えつつ、発掘遺構から基壇形態を復原する考察過程を説明しました。

今回、所長が講演したこともあり、会場が満員になるほどの盛況ぶりでした。

（平城宮跡発掘調査部 平澤麻衣子）



「奈良の都を掘る」リーフレット表紙



公開講演会ポスター

研究会

「日本遺跡学会」の設立をめざした事前活動

各地でおこなう遺跡の保存と活用には、遺跡の持つ学術的な情報をより効果的にわかりやすく伝えるために斬新かつさまざまな工夫がなされ、また、町おこしや町づくりのために遺跡を有効に活用することも検討されています。そして、遺跡の重要性が問われる一方で、遺跡の在り方、現代社会における遺跡の位置づけ等に関する研究がますます重要になってきています。こうした状況の中で、奈良文化財研究所は学会設立に協力するため、「遺跡学をめざした、遺跡の保存と活用に関する研究集会」を開催してきました。

第1回の研究集会は、2000年11月に開催し、坪井清足元奈良国立文化財研究所長の「遺跡学事始め」と題する基調講演をお願いしました。講演ではわが国における初期の遺跡整備とその哲学について、エピソードをまじえながらご紹介いただきました。続いて、全国の埋蔵文化財担当者から直接、遺跡の保存と活用の事例をご紹介いただきました。第2回目の集会でも同じように全国の事例紹介をお願いしました。第3回では「フランス等海外における文化財保護法」、「世界文化遺産登録の事情」と題する特別講演に次いで、「設立趣意文」や「学会規約」の案文を参加者全員で検討しました。そして、2003年2

月1日、「日本遺跡学会」が設立される運びとなりました。

設立趣意文（仮）の結びには、『現代社会の中で遺跡とは何か、遺跡をどのように保存・活用するかを、学際的、国際的なレベルで研究し、ひいては遺跡の本質と、現代あるいは将来におけるあるべき姿を体系化していく必要があります。そのため、遺跡をとおしてさまざまな分野の人たちが情報交換、研究、交流する場として「日本遺跡学会」を設立する。』と述べました。（埋蔵文化財センター長 澤田正昭）



マイクで説明する坪井清足 元奈文研所長

木簡学会第24回研究集会

今年も恒例の木簡学会総会・研究集会が、2002年12月7日・8日の両日にわたって、平城宮跡資料館講堂で開かれました。

7日は総会の後、研究集会を行い、田良島哲氏（文化庁美術学芸課）に「中世の木札文書」という研究報告をいただきました。田良島氏の報告は実態のよくわからなかった中世の木簡使用のあり方について文献史料から検討を加え、これまでの研究の空白を埋めるものです。木簡の使用は古代だけでなく中近世を通じて続き、最近出土事例も増えていますので、今後の本格的な議論の展開が期待されます。

8日は渡邊晃宏（奈文研）「2002年全国出土の木簡」で2002年の木簡出土状況を概観した後、『日本書紀』にみえる白錦後苑の比定地ともされる飛鳥京跡苑池遺構の発掘調査の概要について、調査を担当された奈良県立橿原考古学研究所のト部行弘氏から「飛鳥京跡苑池遺構の調査の概要」と題するご報告をいただき、また出土した木簡について解説に当たっている同研究所の鶴見泰寿氏から「飛鳥京跡苑池遺構出土木簡」というご報告をいただきました。木簡の時期は天武朝から八世紀までの長期間にわたり、遺跡の性格も含めて活発な議論が行われました。

木簡学会は現在個人会員327名、団体会員4団体、